

強く生きる

篤姫 あつひめ

一八六八年（慶応四年）四月。日本では、長く続いた武士の社会が終わりを告げ、明治の世が幕を開けようとしていました。遡る

こと六か月前の※大政奉還で、政権が幕府から朝廷へ返上されたの
に続き、このとき、江戸城が新政府に明け渡されたのです。

この江戸城の明け渡しは、世に言う「江戸城無血開城」として、

話し合いにより成し遂げられました。そして、その結果、多くの徳川
家の人々の命を救うこととなったのです。実はそこには、一人の女

性の活躍がありました。



【篤姫】

（尚古集成館蔵）

※ 篤姫は、年齢や立場に
に応じて様々に名前を変えているが、ここでは、
全て篤姫で統一する。

【大政奉還】

一八六七年（慶応三年）。
政権を、江戸幕府から朝廷（天皇）へ返すこと。

【今和泉家】

島津家の分家の一つ。

その名を、天璋院篤姫。薩摩藩に生まれ育ち、徳川家の第十三代将軍家定の妻となった人でした。

篤姫は、一八三五年（天保六年）、薩摩藩の今和泉島津家第十代当主、忠剛の長女として生まれました。幼い頃の篤姫は、兄たちと一緒に家の外で遊び回る、とても元気な女の子だったといえます。

一方、この時代の日本を支配していたのは、江戸（現在の東京）の徳川幕府です。その第十三代将軍となっていた家定は、それまでに二人の妻を迎えていましたが、どちらも病気で亡くなっています。そうして、家定将軍の新たな妻を、薩摩藩の島津家から迎えた

【関連年表】

一八三五年 誕生

※ 翌年の説もある。

一八五三年

島津斉彬の養女となる。

一八五六年

近衛家の養女となる。

徳川家定と結婚。

一八五八年

徳川家定（夫）死去。

島津斉彬（養父）死去。

一八六八年

江戸城無血開城。

一八八三年 死去

いという話が持ち上がったのです。

これを聞いた薩摩藩主、※島津斉彬が白羽の矢を立てたのが、篤姫でした。当時、斉彬は屋敷を訪れた越前藩主松平慶永に、次のようなことを伝えていきます。

「がまん強く、幼い頃から怒ったところを見たことがない。不満を言うこともなく、たいへん心が広く思いやりがある。軽はずみなどころはなく、おだやかで人と接することにも優れている。」

篤姫のはきはきとした受け答えの様子や立ち振る舞いを見て、その能力を確かに感じ取っていた斉彬は、当時十八歳の篤姫を自分の養女にしました。そして、それから將軍家に嫁ぐまでの間、將軍の妻となるための厳しい修行を行わせたのです。

【島津斉彬】

薩摩藩第十一代藩主。藩の近代化を進めるための様々な事業を行った。



(尚古集成館蔵)

【養女にする】

義理の娘にすること。

こうして一八五六年（安政三年）、篤姫は正式に徳川家定の妻となり、江戸城の※大奥での生活が始まりました。今までの生活とはまったく違う、様々な細かいいきまりがある中で、およそ三千人といわれる大奥の女性達のトップに立つことになったのです。

地方の大名の娘が將軍の妻となることは、江戸幕府の長い歴史上も※一例だけでしたが、篤姫は、自分に与えられた役目を前向きな気持ちで受け入れ、大奥での生活に全力を注いでいきました。

そんな篤姫に、とても悲しい出来事が、相次いで起こります。結婚から二年も経たないうちに、夫の家定が病気で急死し、さらにその十日後には、養父である斉彬も、この世を去ってしまったのです。

【大奥】

江戸城の中で、將軍の妻や、それらにつかえる女性達が暮らしていた所。

※ もう一例は、十一代將軍家斉に、薩摩藩第八代藩主島津重豪の娘茂姫が嫁いでいる。

はるばる江戸にやって来た篤姫は、大きな心の支えを一度になくしてしまいました。このとき二十三歳だった篤姫の悲しみは、どれほどだったでしょう。それでも篤姫は、自分の生まれ育った遠い故郷を思いながらも、大奥の人間として、徳川幕府を支えていこうと覚悟を決めたのでした。

しかし、時を同じくして、幕府と日本は激動の時代を迎えようとしていました。一八五三年（嘉永六年）の※ペリーによる黒船来航をきっかけに、それまでの様々な常識は大きく揺らぎはじめ、やがて国内に、江戸幕府を倒そうとする動きが広がっていきます。その中心となったのは、皮肉にも、篤姫の故郷である薩摩藩でした。

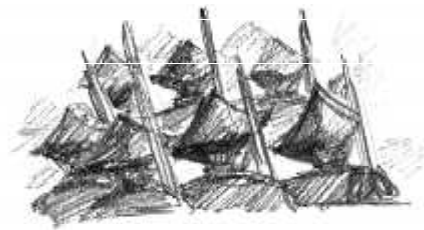
【ペリー】

アメリカ海軍の軍人。
一八五三年（嘉永六年）に、四隻の軍艦（黒船）を率いて浦賀（現在の神奈川県）に現れ、当時鎖国をしていた日本に開国を求めた。

西郷隆盛や大久保利通らに率いられた新政府軍を前に、旧幕府軍は撤退を繰り返します。そしてついに、薩摩藩と長州藩（今の山口県）の軍勢が、篤姫のいる江戸城へと迫りました。薩長軍が押し寄せているという噂を聞きつけた城内の武士達の中には、逃げ出す者も出てきました。

そのような中、薩摩藩から旧幕府に対し、篤姫を引き取りたいという使者がやってきます。薩摩藩としても、ゆかりのある篤姫の命だけは守りたい、という思いがあったのでした。しかし、この申し出に対し、篤姫は次のように答えました。

「私に何の罪があって、薩摩へ連れ戻そうというのか。一歩たりとも、ここから出ることは、ありません。」



【話し合ってみよう】
このときの篤姫の思いについて、話し合ってみよう。

徳川家の一員として、周りを見捨てて自分だけ逃げることなど、篤姫には思いもよらなかったのです。

その代わりに篤姫は、江戸城から新政府軍に手紙を送りました。その内容は、江戸城への攻撃中止と、徳川家の存続を訴えるものでした。

「徳川家に嫁に来たからには、徳川家の人間としてこの命を全うすることは当然のことです。私が生きていながら、もし徳川家に何かありましたら、私は夫や父にあわせる顔もありません。

徳川家を守ってくださるなら、そのことは、私の命を救ってくださるよりもはるかにありがたいことです。これ以上の喜びはござ



いません。」

命をかけて徳川家を守ろうとする篤姫の思いが、この手紙から、

とても強く伝わってきます。この手紙が届けられた後、西郷隆盛や

※**勝海舟**らの活躍によつて江戸城への攻撃は中止され、無血開城が

実現したのでした。なお、この後に江戸城が明治新政府側に明け渡

される時も、最後まで江戸城に残ったのは、篤姫だったと言われて

います。

江戸城を離れた後の篤姫は、どうなったのでしょうか。あまり多

くの記録は残されていませんが、徳川家を守り続けることが自分の

新たな使命と考えた篤姫は、夫である家定の従兄弟に当たる、まだ

【勝海舟】

江戸幕府の役人として、西郷隆盛と江戸城の無血開城について話し合った。

【考えてみよう】

篤姫にとって、徳川家とは、どのような存在だったのだろうか。

幼い[※]家達[※]を大切に育てました。そして篤姫は、家達をはじめ一族が見守る中、四十八歳でこの世を去りました。

江戸から名を変えた東京を中心に、日本が大きく変わっていく中で、篤姫は、しっかりと自分の考えをもち、最後まで徳川家のために自分の命を全うしたのでした。

篤姫の没後から約一二〇年となる二〇〇八年（平成二十年）、篤姫の生涯がNHKの大河ドラマとして放送され、大人気となります。そして、篤姫生誕の地である鹿児島を多くの観光客が訪れる、「篤姫ブーム」が起りました。

ただ將軍の妻としてではなく、一人の女性として強く信念を貫

【徳川家達】

江戸幕府第十三代將軍家定の從兄弟。六歳で徳川家の当主となる。

き、歴史に刻きまれた篤あつ姫ひめの生き方は、それから一せ世い紀き以上を経へた現
在あに鮮あやかによみがえり、世界中の人々の共き感やうかんを呼よんだのです。

